

Viola
Yuki Hyakutake
Violoncello
Masaharu Kanda

The Legacy of Duo

Viola and Violoncello



チェロ 荻田 雅治 Masaharu Kanda

現代日本を代表するチェロ奏者。桐朋学園大学で井上頼豊に師事。1973年、第42回日本音楽コンクール・チェロ部門第1位。1982年から1990年まで東京都交響楽団の首席チェロ奏者を務めた。1982年より小林健次率いるニューアーツ弦楽四重奏団に参加、飛騨古川音楽大賞奨励賞、文化庁芸術祭賞、中島健蔵音楽賞を受賞。「クワトロ・ピアチューリ」におけるショスタコヴィチ弦楽四重奏曲全曲演奏などにより、2010年、第65回文化庁芸術祭音楽部門大賞受賞。個人としても現代音楽の優れた演奏が評価され、1992年、第11回中島健蔵音楽賞受賞。作曲家の信頼は厚く、国内の主要な現代音楽祭に常時出演するほか、室内楽、放送などの分野で欠かすことのできない演奏家の一人である。独奏者としての評価も高く、演奏は円熟の域に達している。現在、東京音楽大学教授、桐朋学園大学講師。



ヴィオラ 百武由紀 Yuki Hyakutake

現代日本を代表するヴィオラ奏者。東京藝術大学付属高校を経て、同大学院修了。井上武雄、浅妻文樹、ウィリアム・プリムローズ、セルジュ・コロの各氏に師事。1999年まで東京都交響楽団に在籍し、首席ヴィオラ奏者を務めた。邦人作品、現代曲の初演も多数手掛けており、1999年、日本音楽コンクール作曲部門の演奏に対して審査員特別賞受賞。2005年に大谷康子、齋藤真知亜、荻田雅治の各氏とカルテット「クワトロ・ピアチューリ」を結成。ショスタコヴィチの弦楽四重奏曲全曲演奏などが高い評価を得て、2010年、第65回文化庁芸術祭音楽部門大賞受賞。同年、東京シンフォニエッタのメンバーとして第10回佐田啓三賞受賞。室内楽、ソロ、オーケストラと幅広く活躍し、「どのようなアンサンブルにあっても常に音楽を活性化できる類い稀なヴィオラ奏者」との評価を得る。現在、愛知県立芸術大学名誉教授、東京音楽大学客員教授、名古屋音楽大学客員教授。

Producer: 西岡 龍彦 Tatsuhiko Nishioka (NOISIA)
Recording Engineer: 西本 憲吾 Kengo Nishimoto (VIVID productions)

Art Direction: 山内 知江子 Chieko Yamauchi
Photos: 堀田 力丸 Rikimaru Hotta (ブックレット表/裏)
Liner Notes: 遠山 菜穂美 Naomi Toyama

Special Thanks to
檜山 哲彦 Tetsuhiko Hiya / 麻柄 明日香 Asuka Magara / 川端 萌 Moe Kawabata

企画・制作: P.O.D. (Project OVEST Duo)
Recorded: 21&22 September 2021, Fuchu-no-Mori Theater, Wien Hall
録音: 2021年9月21 & 22日、府中の森芸術劇場「ウィーンホール」

musicatelier
NOISIA Co., Ltd.

vivid
PRODUCTIONS Co., Ltd.

EVER
GREEN
PUBLISHING

＜取り扱い上の注意＞●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないでください。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないでください。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないでください。＜保管上の注意＞●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないでください。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管してください。●プラスチック・ケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをする可能性があります。

フランソワ・クーブラン François Couperin (1668-1733)

「趣味の融合または新コンセール集」より第13番

ヴィオラとチェロのためのコンセール(1724刊)/ フーゴー・ルフ編

Treizième Concert, extrait de "Les goûts-réunis ou Nouveaux Concerts"

Concert for Viola and Violoncello / ed. by Hugo Ruf

7:20

- 1 I Vivement(Prélude)
- 2 II Air : Agréablement
- 3 III Sarabande : Tendrement
- 4 IV Chaconne légère

1:00

2:01

1:49

2:20

ジャコッペ・チェルベット Giacobbe Basevi CERVETTO (1680?-1783)

ディヴェルティメント op.4-1 (1754頃)/ エドヴィン・コッホ編

Divertimento op.4-1 / ed.by Edwin Koch

12:27

- 5 I Adagio
- 6 II Andantino
- 7 III Tempo comodo

2:30

4:38

5:15

パウル・ヒンデミット Paul Hindemith (1895-1963)

ヴィオラとチェロのための二重奏曲(1934)

Duett für Bratsche und Violoncello

- 8 Schnelle Achtel

5:46

ジークムント・シュル Zikmund Schul (1916-1944)

二つのハシディック・ダンス(1941/42)

Zwei Chassidische Tänze op.15 Version for viola and cello

4:04

9 I Allegro moderato

1:27

10 II Allegretto

2:34

ウォルター・ピストン Walter Piston (1894-1976)

ヴィオラとチェロのための二重奏曲(1949)

Duo for Viola and Violoncello

14:16

11 I Allegro risoluto

4:56

12 II Andante sereno

4:35

13 III Allegro brillante

4:39

ヴィトルト・ルトスワフスキ Witold Lutoslawski (1913-1994)

ヴィオラとチェロのための牧歌集(1962)

Bucolics for Viola and Cello

7:27

14 I Allegro Vivace

1:14

15 II Allegretto sostenuto, poco rubato

1:14

16 III Allegro molto

0:48

17 IV Andantino

2:16

18 V Allegro marciale

1:45

Total Playing Time : 52:04

フランソワ・クーブラン (1668-1733)

「趣味の融合または新コンセール集」より第13番

ヴィオラとチェロのためのコンセール(1724刊)/ フーゴー・ルフ編

曲目解説 遠山菜穂美 Naomi Toyama(東邦音楽大学教授)

18世紀フランス、晩年の国王ルイ14世(1638-1715)が催す宮廷音楽会では、王室のオルガン奏者兼クラヴサン(チェンバロ)奏者、フランソワ・クーブランのクラヴサン曲や合奏曲が、音楽好きの国王たちを楽しませていた。クーブランはフランスの音楽家一族の出身で、その才能は国外にも知られており、J.S. バッハも高く評価していたほどだった。

クーブランは国王の最晩年に、『王のコンセール集』を作曲した。「コンセール」とは合奏のことである。この舞曲を中心とする合奏曲集は、若い頃にみずからバロックダンスを踊った老王をたいへん喜ばせた。曲集が1722年に出版された時、国王はもうこの世を去っていたが、クーブランは王のように人々に喜んでもらいたいと考え、1724年に続編にあたる『趣味の融合、または新コンセール集』を出版した。その「第13番」(《王のコンセール集》からの通し番号)は、低音部譜表で書かれた二重奏である。曲集の初版には、目次に「2つのヴィオラ・ダ・ガンバ、または2つのバソン(ファゴット)のために」とゆるやかな楽器指定があるものの、表紙にはタイトル下に「あらゆる楽器のために」と書かれていることから、楽器の選択は自由だったと考えられる。「第13番」の楽譜ページ冒頭には“à 2 instrument à l' unisson”(ユニゾン(2つの楽器で))と書かれているが、一般的な「ユニゾン(同音)」の意味でないことは明らかであり、オーボエ奏者のT. インデアミュールは、「同じ音域の2つの楽器で」と解釈している。この録音ではドイツの古楽奏者、F. ルフが編纂した「2挺のチェロ版」を使って第1パートをヴィオラ、第2パートをチェロが演奏しているので、同じ音域で動くそれぞれの音色の微妙な違いを楽しむことができる。

なお、曲集のタイトルにある「趣味の融合」とは、フランスとイタリアの様式の融合を意味している。たとえば、各コンセールが舞曲を中心に構成されていること自体、イタリアのアルカンジェロ・コレリ(1653-1713)の室内ソナタを模範にしたものと考えられる。クーブランはイタリアの様式もふまえつつ、18世紀フランスで流行した繊細優美で装飾豊かなロココ風のスタイルで曲を書いた。



I ヴィヴマン(プレリュード) Vivement(Prélude)

4分の4拍子、ト長調。活発な前奏曲。ヴィオラとチェロがカノン風に旋律を模倣しながら進む。

II エール：心地よく Air : Agréablement

8分の6拍子、ト短調。「エール」は旋律的な楽曲を指す。2つの楽器がカノン風に追いかかけ合ったり平行して動いたりしながら、短調のメランコリックな旋律を奏する。

III サラバンド：優しく Sarabande : Tendrement

4分の3拍子、ト長調。「サラバンド」はフランスの宮廷舞曲にも取り入れられた3拍子のゆるやかな舞曲。穏やかな曲調に、低弦の深い音色がよく似合う。

IV シャコンヌ・レジェール Chaconne légère

ト長調、8分の3拍子。一般的に「シャコンヌ」は変奏形式による荘重な舞曲でフランスでも流行したが、この曲は一風変わった「軽やかな」シャコンヌ。2つの楽器が、ト短調の中間部をはさんでカノン風に快活な旋律を奏する。

ジャコッペ・チェルベット (1680?-1783)

ディヴェルティメント op.4-1 (1754頃)/ エドヴィン・コッホ編

ジャコッペ・チェルベットは、ユダヤ系イタリアの作曲家、チェロ奏者で、おそらくイタリア北部のヴェネツィアで生まれたと伝えられているが、1738年頃にイギリスのロンドンに渡った。イタリア時代の活動については記録が残っておらず、生年すら確かではない。

18世紀前半、多くのイタリア人音楽家がロンドンに渡った。チェルベットのほか、チェロ奏者のニコラ・ハイム(1678-1729)、ヴァイオリン奏者のフランチェスコ・ジェミニアーニ(1687-1762)、などもその例である。当時ロンドンはヨーロッパでいち早く公開演奏会が開かれた音楽都市であり、チェルベットはコンサート活動のほか、オーケストラで演奏することもあった。また、音楽著述家のチャールズ・バーニーが自宅で催すプライベートな音楽会などにも呼ばれていた。ただしバーニーは、技術的には華やかだが音に優雅さが欠けている、と辛口の評価を残している。演奏のみならず、チェルベットはロンドンで自作の出版も手がけている。演奏と楽譜出版は、自らを宣伝するためにもっとも有効な手段だったのである。

チェルベットは1760年代のはじめにソリストとしての活動から引退し、息子のチェロ奏者、ジェームズに道を譲った。だが、1780年代に入ってもコンサートに出演していたと息子は証言している。生年が確かならずで100歳を超えていることになり、並外れたバイタリティの持ち主だったことになる。なお、J. ゴッファニーによるチェルベットの肖像画(1768-70頃)が残されているが、チェロを構えて楽しそうに微笑む姿からは、気さくな人柄が窺われる。立派な鼻の持ち主だったことから「ノージー(Nosey)」の愛称で呼ばれていたという。

《ディヴェルティメント op.4-1》は、1754年頃に作曲された「6つの小品またはディヴェルティメント」の第1曲である。本来は2挺のチェロのための作品だが、今回はヴィオラとチェロで演奏する。しかも高域をチェロが、低域をヴィオラが担当するというユニークな手法がとられている。演奏家の言によれば「低域が魅力的なチェロだが、もう一つの顔ともいえる高域の音色と表現力が十分楽しめる曲にしかかった」ということである。

I アダージョ Adagio

4分の4拍子、ト短調。荘重な音楽で、付点リズムを特徴とする。1フレーズごとにヴィオラとチェロが交代で旋律を奏する。

II アンダンティーノ Andantino

4分の2拍子、ト短調。はじめに提示された2つの主題が中間部で発展し、最後に再びもとのかたちで戻ってくる形式は、古典派のソナタ形式に近づいている。

III テンポ・コモド Tempo comodo

4分の3拍子、ト長調。2つの楽器が朗らかな旋律をカノン風に追いかけながら奏する。このあとト短調の「ビウ・アンダンテ」、ト長調の「プレスト」(4分の2拍子)とテンポが二転し、ダ・カーポで最初の部分に戻る。



パウル・ヒンデミット (1895-1963)

ヴィオラとチェロのための二重奏曲 (1934)

20世紀ドイツを代表する作曲家、パウル・ヒンデミットは、ヴィオラと関係が深い作曲家として知られている。もともとはフランクフルト歌劇場管弦楽団のコンサートマスターをつとめるほど優れたヴァイオリン奏者であったが、しだいにヴィオラに強くひかれていった。ヴァイオリンの師だったアドルフ・レープナーの弦楽四重奏団や、ハンガリー出身のヴァイオリン奏者、リッコ・アマールと結成した弦楽四重奏団などでヴィオラを担当したほか、ソロのヴィオラ奏者としても高く評価された。自作の初演も行い、わかりにくいとされた20世紀音楽の魅力を直接聴衆に伝えようとした。

だが、ヒンデミットの作曲活動は波乱に満ちていた。第一次世界大戦後の1920年代からドイツ音楽を担う若手として脚光を浴びたが、1933年にナチスが政権を握ると、ヒンデミットの現代的な作風は不協和音にみちた過激なものとなされ、ユダヤ人の演奏家仲間の存在も批判的となって弾圧が始まった。1934年3月に、社会のなかで苦悩する芸術家を描いた交響曲《画家マティス》が初演されるとナチスの弾圧は本格化し、ヒンデミットの作品は「頹廃音楽」のレッテルを貼られ、彼は亡命するしかなかった。

《ヴィオラとチェロのための二重奏曲》は、ちょうどこの《画家マティス》が初演される直前の1934年1月にロンドンで、ヒンデミット自身のヴィオラ、エマヌエル・フォイアーマンのチェロによって初演された。単一楽章の曲で、冒頭に「急速な8分音符で Schnell Achtel」と書かれている。曲は感情に浸らずぎびぎとした調子で進み、ユニゾンで始まってためらうようなフェルマータで終わる冒頭の主題がたびたび現れ、歩みを中断させる。この主題を含む複数の主題が提示されたあと、対位法的な展開部を経て、最初の部分が短縮されたかたちで戻ってくる。曲は荒々しい不協和音を含むが、難解な印象は与えない。リズムカルで活気にみちた音楽は、諧謔的な踊りのようでもある。

なお、初演のチェロ奏者、フォイアーマンは、ヒンデミットとヴァイオリン奏者、シモン・ゴルトバルクと共に弦楽三重奏団を組んでいた。フォイアーマンもゴルトバルクもユダヤ系であったため、ヒンデミットと同様、アメリカに亡命している。



ジークムント・シュル (1916-1944)

二つのハシディック・ダンス (1941/42)

いかなる時代にも、音楽家は社会との関わりを断ち切ることはできない。だが、20世紀のユダヤ人作曲家にとって、社会との関係はあまりにも過酷で、悲劇的なものであった。東欧ユダヤ人の両親のもと、ドイツ東部のケムニッツに生まれたジークムント・シュルは、ベルリンでヒンデミットに、また、1933年にナチスのユダヤ人迫害を逃れてチェコのプラハに移ってからはアロイス・ハーバ(1893-1973)らに作曲を学んだ。プラハで活躍していたユダヤ人作曲家、ヴィクトル・ウルマン(1898-1944)もシュルの才能を高く評価していた。

第二次世界大戦中の1941年、シュルはプラハから北西60キロほどのテレジン(ドイツ語ではテレージエンシュタット)の強制収容所に送られた。この収容所は、ナチスが西欧諸国への宣伝用に建てたものだった。つまり、ナチスは収容所内のユダヤ人芸術家たちの文化活動を奨励することによって、ユダヤ人を迫害しているのではなく保護しているように見せかけたのである。「レクリエーション」と称する時間枠のなかで演劇やコンサート、オペラ上演などが活発におこなわれ、視察団に披露されたほか、宣伝用の記録映画まで作られた。収容所にはシュル以外にもたくさんの作曲家が収容されており、そのなかには前述のウルマンや、ヤナーチェクの弟子のパヴェル・ハース(1899-1944)、ツェムリンスキーの弟子のハンス・クラウシャ(1899-1944)などもいた。だが、音楽家たちの多くは、宣伝の役目がおわるとアウシュヴィッツ絶滅収容所へと移送された。

《二つのハシディック・ダンス》は、シュルがこのテレジン収容所のなかで書いた作品である。「ハシディック」とは「ハシディズムの」の意で、ハシディズムは18世紀半ばに東欧ユダヤ人のあいだに広がった宗教復興運動である。東欧に移住したユダヤ人が迫害されて心が荒廃していたとき、指導者のひとりだったパール・シエム・トーヴが、現実から逃れるために精神を高揚させてユダヤ民族の本質をとるもどし、そこに喜びを見出そうと唱えたのである。礼拝ではニグン(言葉のない調べ)を歌うことが重要とされた。瞑想的な祈りのなかで苦しみ喜びとなり、精神が高揚していく。この宗教体験

がニグンを歌うことによっていつそう深まり、ついには恍惚とした踊りへといたるといふ。シュルのこの作品は、ニグンの恍惚を器楽で表現したものと解釈できよう。

シュルがテレジンで書いた作品にはこのほか、《独奏ピアノのためのフーガ》(1941)、ヴァイオリンとヴィオラのための《二重奏曲》(1943)などがある。シュルがこの収容所で肺結核のために亡くなったのち、手書きの楽譜を大切に保管していたのはウルマンだった。だが、そのウルマンも1944年にアウシュヴィッツに送られ、ガス室で殺された。こんにちシュルの作品は、Boosey & Hawkes社の傘下にあるBote & Bock社の「テレジン音楽記念プロジェクト」シリーズから出版されている。《ハシディック・ダンス》は収容所内で演奏可能な種々の弦楽器で演奏されたのであろう。今回の「ヴィオラとチェロ」版のほか、「2台のヴァイオリン」版、「ヴァイオリンとチェロ」版も出版されている。

I アレグロ・モデラート Allegro moderato

ハシディズムの音楽には、シナゴーグ(ユダヤ教の会堂)の音楽と、スラブ・東欧系音楽が混じり合っているという。付点リズムで、瞑想的、東洋的な雰囲気をもつ旋律が、対位法的な動きを伴いながら2度繰り返される。「エネルジコ」と書かれた力強い中間旋律のあと、激しい高揚感のなかで最初の旋律がもどってくる。突然の鎮静のあと、曲は閉じられる。

II アレグレット Allegretto

ハシディズムのニグンのように、メリスマ風の装飾豊かで即興的なメロディが歌われていく。途中、ヴィオラがカデンツァ風のパッセージを奏する。拍子がひんばんに変わり、伴奏がヘミオラによって旋律と異なる拍子で動くため、心地よく感覚が麻痺し、瞑想的な気分へと誘われる。

ウォルター・ピストン (1894-1976)

ヴィオラとチェロのための二重奏曲 (1949)

ウォルター・ピストンはイタリア系アメリカ人で、ダンス楽団でピアノやヴァイオリンを、第一次世界大戦中は海軍軍楽隊でサクソフォンその他を演奏したのち、ハーバード大学で作曲を学んだ。さらに 1920 年代にはパリのエコール・ノルマルでポール・デュカス、ナディア・ブーランジェらに作曲を学び、学内オーケストラではヴィオラを担当していた。

ピストンに帰ると、1926年から1960年まで母校ハーバード大学で教鞭をとり、エリオット・カーター(1908-2012)、ルロイ・アンダーソン(1908-1975)、レナード・バーンスタイン(1918-1990)などの優れた作曲家を育てた。ハーバードでの教育から『和声法』、『対位法』、『管弦楽法』の3大著作も生まれた。ピストン交響楽団の音楽監督、セルゲイ・クーセヴィツキーに作曲の才能を見出され、多数の作品を委嘱された。その後、ニューヨーク・フィルハーモニックをはじめとするアメリカの主要なオーケストラから委嘱を受けるようになった。

ピストンは遅筆の作曲家で、冗談まじりに「1つの音符に1時間」と話すこともあったという。だが、ピューリッツァー賞を受賞した交響曲第3番(1947)と第7番(1960)をはじめとする8曲の交響曲、ニューヨーク音楽批評家賞を受賞したヴィオラ協奏曲(1957)ほか多数のオーケストラ曲や室内楽曲によって、20世紀アメリカを代表する作曲家のひとりになった。

《ヴィオラとチェロのための二重奏曲》は、第二次世界大戦後の1949年にマサチューセッツ州ベルモントで書き上げられ、ロサンゼルス・フィルのヴィオラ奏者、スヴェン・レーヘルと、首席チェロ奏者、クルト・レーヘルに捧げられた。二人はドイツ出身の兄弟で、スヴェンはヒンデミットのヴィオラ・ソナタでグラミー賞にノミネートされたこともあった。曲は3つの楽章からなり、職人肌といわれたピストンらしく、各楽章とも緻密に構成されている。

I アレグロ・リゾルト Allegro risoluto

4分の3拍子。ヴィオラとチェロのピッツィカートと上行旋律によって決然と開始され、2つの楽器が対位的に絡みながら、活潑な第1主題と「ドルチェ・カンタンド」の歌うような第2主題が現れ、これらが展開されていく。

II アンダンテ・セレーノ Andante sereno

「セレーノ」は「澄み切った、晴朗な」の意。2つの楽器が対位的に、表情豊かな旋律を奏する。静けさがかすかな緊張をはらんでいるようにも感じられる。途中で音が細くなり音楽は高揚感を増すが、ふたたびはじめの静かな旋律にもどる。最後はハ長調の主和音で終わる。

III アレグロ・ブリランテ Allegro brillante

華やかで活気に満ちた終楽章。ヴィオラとチェロが対位的に掛け合う。さざめくような序奏に導かれて歯切れよい第1主題が、続いて「グラツィオーソ(優雅に)」と書かれた第2主題があらわれ、この2つの主題が交代していく。調性(イ長調)が明確な音楽である。

ヴィトルト・ルトスワフスキ (1913-1994)

ヴィオラとチェロのための牧歌集(1962)

ヴィトルド・ルトスワフスキは、20世紀を代表するポーランドの作曲家で、とくに第二次世界大戦後の音楽界に大きな影響を与えた。ワルシャワでピアノ、ヴァイオリン、作曲、数学を学んだルトスワフスキは、さらにパリでナディア・ブーランジェに作曲を学びたかったが、第二次世界大戦が始まり、兵役に就いた。戦時中は、ナチス・ドイツ占領下のポーランドで作曲家仲間のアンジェイ・パヌフニク(1914-1991)らとともにカフェで演奏を続けるなど、レジスタンス運動(抵抗運動)に参加した。また、ルトスワフスキの現代的な作風は政治的な圧力を受けた。こうした祖国の厳しい状況を通してポーランドの民俗的な音楽への関心を深めたと考えられ、戦後、民俗音楽にもとづく歌曲や器楽曲を書き始めた。

《ヴィオラとチェロのための牧歌集》もその一つである。ルトスワフスキは1952年にピアノ曲として作曲し、10年後の1962年に、ウクライナ生まれのアメリカの名チェリストで友人のグレゴール・ピアティゴルスキー(1903-1976)の頼みで、ヴィオラとチェロ用に編曲した。作品は5つの小品からなり、どれもルトスワフスキの故郷であるポーランド北東部のクルピエ地方の民俗音楽を素材としている。



I アレグロ・ヴィヴァーチェ Allegro Vivace

ヴィオラの活発で歯切れよい主題を、チェロのすばい動きが伴奏する。中間部はテンポがやや緩やかになり、チェロがやわらかな主題を、ヴィオラが対旋律を奏する。ふたたび最初の主題が1オクターヴ高い音で戻ってくる。

II アレグレット・ソステヌート、ボコ・ルバート Allegretto sostenuto, poco rubato

ヴィオラの夢想的な主題に、チェロのピッツィカートが伴う。途中からテンポが上がって活発になるが、ふたたびもとの夢想へと戻る。これが2回繰り返される。

III アレグロ・モルト Allegro molto

シンコペーションやヘミオラがリズムに活気を与えている。同音反復が多用されている。

IV アンダンティーノ Andantino

「カンタービレ(歌うように)」と書かれた牧歌的な主題は高音域にも及ぶが、つねにチェロが奏でる。ヴィオラが重音などでそれを伴奏する。

V アレグロ・マルチアーレ Allegro marciale

行進のように機械的なスタッカートの主題を、チェロが完全5度の重音で伴奏する。続いてチェロが、「フラウタンド flautando」と書かれているとおり、弓を指板に近づけてフルートに似た柔らかな音色で甘美な主題を奏する。これが2回繰り返され、後半はヴィオラが冒頭の行進曲風の主題を低音域で奏すると、2つの楽器がいつしよに重々しい和音を奏し、最後はまた行進曲風に終わる。